Toyama University

富山大学教育学部紀要 №60：89－106（平成18年）

西南日本における信仰施設と巡拝について

田　上　善　夫

（2005年10月13日受理）

Belief Facilities and Their Pilgrimage in South-western Japan

Yoshio TAGAMI

E-mail：tagami@edu.toyama-u.ac.jp

Abstract

In this research, the examples of the sacred place and the belief facilities in southwestern Japan were investigated. On the basis of it, the factor of the sacred place establishment was studied. The main results are as follows.

The origin of the sacred place in various places is an ancestor's grave, a Shinto shrine, a buddhist temple, a holly mountain, etc. The influence of asceticism on the sacred place is large in the Chugoku, Shikoku and northern part of Kyushu. In the Shikoku sacred place, as is seen from the custom that people visit Koyasan after the pilgrimage, the relation with esoteric Buddhism is strong. However, the distribution of sacred places differs regionally and the sacred places are few in the Southern part of Kyushu. Though it is not called the sacred place in Okinawa, and a lot of pilgrimage manners and customs, including the pilgrimage of the king's sage marks, are seen in the people.

Belief facilities related to the sacred place vary from temples to forests. As for the sacred place, relations with the esoteric Buddhism sect distribution are seen. Though the Buddhist temples are few in the Ryukyu Islands, the transformation of the belief facilities related to the sacred place is seen. Esoteric Buddhism, etc. and a traditional belief mixed in Okinawa and the former festa facilities changed into Udaki shrine in the Sakishima Islands.

At the first stage of the sacred place approval, the statesmen went on a pilgrimage to the founder's sage mark, and the various place communities went on a pilgrimage to the ancestor's ground. These religion and administration were imitated, and a pilgrimage came to be done as a seasonal event also in the people. On the other hand, there are forest wandering and peak-round training in esoteric Buddhism and asceticism. When the syncretization of Shinto with Buddhism advanced and the sacred point obtained universality, the sacred place was established. In addition, the sacred place in the buddhist temple was given the soul as an entrance to the paradise, and that led to the development of the sacred place.

As stated above, the sacred place pilgrimages are considered to be based on the religion and administration in the society and the forest training of the individual. If it could be the case that these had developed into private manners and customs, it might correspond to the change of the major sacred place pilgrimage from Kumano and Saigoku sacred place pilgrimage to the Shikoku pilgrimage. Therefore, a regional difference of the sacred place in southwestern Japan may be recognized as an age difference of development.

キーワード：霊場，寺院，宗派，西南日本

Key words：Sacred place, Temple, Sect, Southwestern Japan

NII-Electronic Library Service

Toyama University

Ⅰ　はじめに

観音霊場は中世に広域を対象として開創され，大師霊場は近世より多様な霊地を対象に開創された。こうした霊場では，個々の札所寺院は山麓や中腹に位置することが多い。さらに地方霊場でも，それらの札所は類似の地形に位置している。また集落の背後にある里山などにも，小さな霊場が多数開創され，観音などを祀る無人の堂庵や，祖先の名を刻んだ路傍の石仏などが巡られている。

東北日本や中央日本では，こうした霊場は規模や形態，また開創の年代などさまざまで，これには社寺などにみられる地域の宗教的基盤や，地方霊場の時代的な展開の過程などが影響していると考えられる(田上善夫，2005a，b)。西南日本には，中世以前に九州西国，四国，出雲，讃岐，神島，伯耆などの霊場が開創されている。近世以降にも，観音霊場，大師霊場が多数開創され，観音霊場はとくに山陰と九州北部をはじめ広域に分布し，大師霊場は瀬戸内や九州北部に多数が開創されている。

ただし九州南部では地方霊場は少なく，また南西諸島では聖跡や祖先葬地の聖地巡拝が行われるが，霊場とは呼ばれていない。西南日本においては地方霊場の地域的差異は大きく，それにはこの地域における宗教的基盤や，とくに歴史的な経緯が影響しているものと考えられる。

本論では西南日本における地方霊場の差異と，その成立の要因や経緯を明らかにする。そのために，まず西南日本における代表的な霊場を選び，巡拝の実態について事例調査を行う。次に霊場の構成要素である信仰施設，すなわち寺院，神社，森山，御嶽などの分布を中心にして，地域の宗教的基盤を一般的に明らかにする。さらにこれらの巡拝習俗や信仰施設などの西南日本における地域的差異を検討し，霊場成立の要因の解明を試みる。

Ⅱ　各地の霊場と霊地

1.　中国・四国地方

広域の中国観音霊場

中国地方では，出雲観音霊場が千年前の開創との伝承をもつが，一国霊場を超える規模のものはみられなかった。中国観音霊場は，中国地方のとくに海岸部について，全域を巡るように開創された(図 1)。

札所のうち内陸部に位置するのが，第四番木山寺である(図 2)。同寺は，岡山県真庭郡落合町の旭川支流にある木山(414m)の頂上にあり，高野山真言宗である。鎮守の木山神社は，天正九(1581)年建立の旧本殿が残り，また昭和 37 年に山麓に里宮が造営されている。素盞嗚尊を祀り，木山牛頭天王社，また感神院といわれる。寺の本尊の薬師如来は，牛頭天王の本地である。境内に善覚稲荷大明神があり，その本地が十一面観音である。

第十四番多喜山水精寺大聖院(たきざんすいしょうじだいしょういん)は，厳島神社の南 400m，弥山(みせん)(530m)の山麓斜面に位置する。宮島は，本土とは幅 500m の大野瀬戸で隔てられた，長さ 10km ほどの細長い島である。山体は白亜紀末の黒雲母花崗岩で，斜面のアカマツを主体とした林内には，クロバイ，シキミ，ヤブツバキ，シロダモ，イヌガシなどの常緑広葉樹も混じる。奥の院への参道は谷筋を通り，道祖神，太田神，白髭大明神，素盞嗚神，大国主神，猿田彦神などが祀られる。

同寺は，大同元(806)年に空海が対岸の地に開山したといわれ，鎌倉時代に厳島に移った。厳島神社の別当であり，真言宗御室派の厳島御室大本山である。参道は厳島神社本殿を向き，仁王門から御成門まで石段が続き，右手の観音堂に元厳島神社の本地堂本尊の十一面観音，正面に波切不動明王，八角万福堂に七福神などをまつる。

第三十一番三徳山三仏寺は，鳥取県東伯郡三朝町にあり，倉吉からさらに内陸に入った三徳川の上流に位置している。天台宗寺院で，夏会式では住職の大護摩供の祈祷，僧侶の大般若転読がされる(野津　龍，1985)。一番高い投入堂は懸造り建物で，河原から 240m 上の崖の上部にある。

新たな広島新四国八十八ヶ所霊場

とくに瀬戸内では，小豆島のような島嶼に，四国八十八ヶ所の写し霊場が多い。また都市部とその周辺地域にも，新たに霊場が開創されている。その一つである広島新四国霊場は，広島市を中心にし，発願，結願の札所を宮島においている(図 3)。

NII-Electronic Library Service

Toyama University

第一番亀居山放光院大願寺は，厳島神社本殿南西の海際に位置し，高野山真言宗で，釈迦如来，厳島弁才天をまつる。厳島神社の寺社奉行として建造や復旧を行うが，筑前筥崎八幡宮，豊前宇佐八幡宮の修理造営にもあたった。神社北東側の海岸には千畳閣と五重塔，山麓側に光明院，さらに称名庵，宝寿院，真光寺，徳寿寺，存光寺など，寺院が連なる。

札所は本土を巡った後，再び宮島に戻る。第八十七番多喜山水精寺大聖院は，前述の中国観音霊場第十四番でもある。また，安芸西国第二番霊場，西瀬戸極楽三観音霊場でもある。

結願の札所は，弥山山頂付近にある(図 4)。第八十八番多喜山水精寺弥山本堂は，虚空蔵菩薩をまつる。求聞持堂といわれ，真言行者の秘密練行場である。対面する霊火堂は二間四方，吹き抜け二層の建物である。一間四方ほどの炉に一千有余年続く火が焚かれ，杉の葉などが投げ込まれて建物は煤で燻されている。山頂との間に，鎮守の三鬼大権現，小さな文殊堂と観音堂，大きな大日堂がある。南西に離れた御山神社は，神仏分離後，厳島神社の奥宮となる。

札所は発願・結願の宮島から対岸に移り，さらに広島市の北部を経て東広島市方面に続く。西条盆地は，花崗岩地帯で滞水性に乏しく，多数の溜池が分布する。山陽新幹線北側の賀茂台地は，緩やかな起伏が続き，黒瀬川周辺の水田地帯は住宅地化が進む。第四十一番勝谷山観現寺は，境内に厄除祈願の赤い幡が多数立てられる。真言宗御室派で，聖観世音菩薩をはじめ不動明王，また勝谷山石鎚大権現を祀る。なお，盆地の北西部の八本松は，山陽本線最高所の駅(255m)だが，その西から北にかけて八十八石仏めぐりがある。大正末期の創建で，山もめぐって約 9km，所要 4〜6 時間という。

さらに黒瀬川を下って呉市に続く。市の中心部の東方にある湯舟山中腹まで，斜面に住宅地が続く中に，第四十五番湯舟山萬年寺がある。真言宗醍醐派で不動明王をまつり，境内には多宝塔が建ち，伏見稲荷大明神や西国三十三観音もまつられる。

広島湾には多くの小島があり，太田川の三角州上にも多くの丘が残る。広島港の南方の宇品島は陸続きとなり，高層マンション，リゾートホテル，マリーナが作られている。宇品山(58m)の南方東面に，第五十一番観音寺があり，禅宗である。なお，別院がある。平成 16 年の台風 18 号では瞬間最大風速 60.2m/s に達し，山の上の木が多く倒れたが，同寺は無事であったという。

広島駅の南，京橋川と猿猴川の間に，比治山(71m)が南北に伸びる。西側斜面に比治山神社をはじめ多くの寺社がある。第五十四番多聞院は，真言宗寺院で，慶長九(1604)年に移転してきた。境内は風化が進んだ花崗岩の崖に囲まれ，本門からすぐの持佛堂に虚空蔵菩薩，奥側の毘沙門天本堂に毘沙門天王がまつられる。境内の斜面に新西国三十三所，新四国八十八所などが設けられている。第五十五番良雲山千日寺長性院は，西向き斜面の急坂上に大きな仁王門，さらに本堂がある。元和三(1617)年の創建の浄土宗寺院で，阿弥陀如来をはじめ，境内に水子・身代り・延命地蔵尊をまつる。急斜面に多くの墓石が立てられ，境内の斜面最上部に，鳥居と 2 つの祠が建つ。

第五十六番浄念寺は，広島駅にほど近い住宅街の中にあり，平屋建てで庭に墓石や塔婆が建つ。先の長性院では常念寺が案内されるが，現在は棲真寺に替わっている。第五十七番法然山持宝寺源光院も住宅街にあり，浄土宗鎮西派で阿弥陀如来をまつる。

旧太田川右岸，平和記念公園対岸の第七十一番如意山善応寺は，臨済宗妙心寺派で十一面観音菩薩をまつる。本堂前には鳥居が並び，本堂の正面右手に仏像，左手に鍛冶稲荷がまつられる。この奥には神殿がある。付近は鍛冶屋が多く，鎮守としてお稲荷さんができた。初午は住職が兼任し，本祭や 11 月の鞴祭は神主さんが来る。禅宗寺院では，稲荷神に相当する荼枳尼天が祀られることが多いという。ビルの谷間に，第七十二番無衰山古今院浄国寺がある。浄土宗で，阿弥陀如来をまつり，境内は墓地となり，一角には江戸時代のものを含む墓石を多数集めて供養されている。

江波は広島の外港であったが，現在も漁船が係留され，海神宮がまつられる。すぐ北の小山の頂(20m)に，第七十六番丸子山不動院がある。真言

NII-Electronic Library Service

Toyama University

宗不動教団で，不動明王をまつり，境内には観音などの石仏が立ち並び，赤い鳥居を備えた伏見稲荷が鬼門の方角に祀られている。その南の江波山(38m)には，衣羽神社が鎮座し，旧広島地方気象台の建物が残る。同地に第七十七番補陀落山潮音寺龍光院があり，高野山真言宗で，本堂前に稲荷大明神をまつる。山腹住宅街の道幅は 1m 強しかなく，島のようである。

典型の四国八十八ヶ所

四国八十八ヶ所は，四国地方のみならず全国でも，最も知られた霊場である。この霊場では，遍路が四国海岸部を時計回りに廻る。讃岐の札所は涅槃の道場といわれ，第六十六番以降が香川県にある。とくに讃岐平野には，多くの札所が集まっている。

第八十七番の補陀落山長尾寺は聖観音をまつり，1681 年の再建の際に真言宗から天台宗に改められた。門に大草鞋が吊るされる。弘安六，九年に作られた，凝灰岩製の灯篭風の経幢がある。門前に巡拝者の宿が並ぶ。

結願の第八十八番は，大川郡長尾町の南部にある，医王山大窪寺である(図 5)。四国霊場はここで終わるが，満願成就した者は，さらに高野山奥の院にお礼参りをする風習がある。

この四国霊場で弘法大師の修行を追体験する遍路道は，文化財保護法改正後には文化的・歴史的なものとされるなど(森 正人，2001)，性格は変容している。また四国には大師霊場だけでなく，吉野川流域や阿南市・小松島周辺などに 73 の西国写し霊場が分布する。大正期に開創された里山を巡るものなどが多く，吉野川下流域と上流域には，各道のりが 100km を超す郡霊場がある(山本 準，2004)。

2. 九州地方

古い九州西国三十三観音霊場

九州西国三十三観音霊場は，九州北部を周回し，奈良時代の開創伝承をもち，最古の霊場ともいわれる。発願の英彦山はじめ多くの札所は，修験道にかかわる(図 6)。九州には福岡県の英彦山，宝満山，求菩提山をはじめ，大分県の六郷満山，鹿児島県の霧島山など，多くの修験の山々がある。修験の行者は，平安以来，霊場の開創にかかわってきた。前原市にある第二十九番雷山千如寺でも，観音，雨宮，雷神，かぐつち(火神)などを祀り，風穴二座の笠折権現では，毎年八月に茅で風穴を掩ったという(吉田扶希子，2002)。結願の第三十三番は，太宰府天満宮に近い観世音寺である。

霊山求菩提山の回峰道

修験の霊山には，山内を廻って修行する場がある。求菩提山(782m)は，英彦山の 10km 北東，福岡県豊前市にある。凝灰岩・集塊岩・安山岩質溶岩からなり，侵食を受けて独特の山容をしている。同山の座主園地(570m)の一帯，数百 m 四方には，かつて多くの寺坊が散在し，境内にあった三十三観音石像などが遺るが，現存するのはわずかに岩屋坊のみである。山内の道は，山体を巻くようにつけられ，急な登りでは石段となる。獅子の口という水場より水が流れ，その下方の禊場では，かつて入峯前の新客の加行が行われた。また雪を踏み固めて保存した，氷室跡がある。

およそ 650m より上方では，尾根に沿って南西に急な登りとなる。途中に旧護国寺，鬼神社ともいわれる国玉神社中宮があり，境内に護摩を炊いた跡が残る。さらに全長 181m，約 850 段の鬼の磴とよばれる急な階段の上，山頂部の結界石の内に上宮がある。この求菩提山頂から，5-6 世紀の須恵器の小片が出土するが，白山大権現・十一面観音，また龍神信仰があった(求菩提資料館，2002a，b)。「平成十四年師走十四日，聖護院門跡求菩提山六峰会修験本坊，奉修求菩提白山権現為転読般若心経法力成就大願成就祈攸」と記された札と日本酒が奉納されている。社の裏手には，御神体とされる磐座がある。その右手の辰の口は，下の獅子の口に続く流れである。1m ほどの風穴から蒸気が吹き出し，雪が積もらないとされる。この穴は風天窟ともいわれ，鎮風が祈願された。

磐座より尾根を南西に 300m，胎蔵界護摩場は，もう一つの中心である。付近の如法寺山頂の金剛界護摩場に対するもので，ここから経塚が発掘されている。この護摩場から下り高度 650m 付近に連なる急崖に沿い，大日窟，普賢窟などの並ぶ千日行回峯道が続く(図 7)。

NII-Electronic Library Service

Toyama University

図1　中国観音霊場の巡拝路

中国観音霊場は，昭和56(1981)年に開創された。ほぼ同数の天台系，真言系，禅系寺院からなる。巡拝路はゼンリン電子地図帳Z5のルート探索結果による。図3，図6も同様。

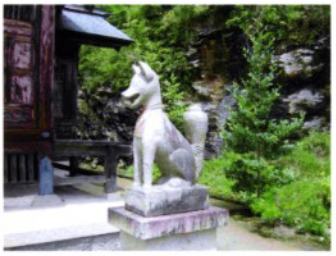

図2　中国第四番 木山寺

善覚は正徳年間(1714) の僧の名で，祭神は赤衾伊努大住日子佐別命(あかふすまいぬおおすみひこさわけのみこと)である。また大正3(1914)年には，千代稲荷神社を合祀した。江戸時代には「牛王祈」または「感神躍」という，覗(みかんこ)の神楽や社僧の薬師の法が行われた(藤巻正之編，1920；加原耕作，1980)。

図3　広島新四国霊場の巡拝路

広島新四国八十八ヶ所霊場は，大正7(1918)年に開創され，昭和48(1973)年の弘法大師御生誕1200年に復興された。真言宗65，浄土宗6，曹洞宗10，臨済宗6，浄土真宗1，の寺院がある。新旧の霊場で，11番は西福寺と養徳院，51番観音寺は元宇品と西広島，56番は浄念寺と棲真寺，84番は潮音院と浄心院の異動がある。

図4　宮島弥山山頂の磐座

大聖院の南1.5kmにある弥山山頂に奥の院があり，仁王門まで十八丁，山頂まで二十四丁という。弥山山頂には，花崗岩の白い巨岩の磐座がある。東方の獅子岩からは，広島湾・瀬戸内海が一望される。山頂一帯は平成16年18号台風で被害を受けたが，神社入口付近も巨木や鳥居が倒れる

図5　四国第八十八番 大窪寺

結願は，医王山大窪寺で，薬師如来をまつる真言宗大覚寺派寺院である。門に大きな草鞋が立てられる。本堂の背後に巌峰があり，奥の院の胎蔵峯寺まで880mある。不動尊，聖観世音をまつり，巳王大明神の幡が立つ。

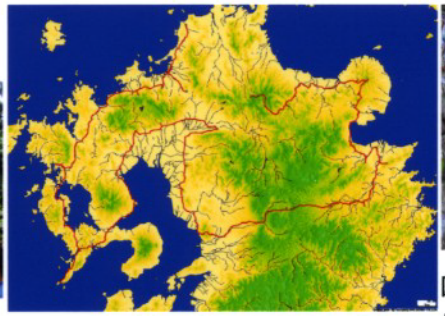

図6　九州西国霊場の巡拝路

和銅六(712)年の日子山権現のお告げ，霊亀二(716)年の熊野権現のお告げによる，法蓮上人や六郷満山を開いた仁聞菩薩らの巡礼に始まるという。西国は西海道諸国の意で，近畿の西国霊場の写しではない(大路直哉，2001)。

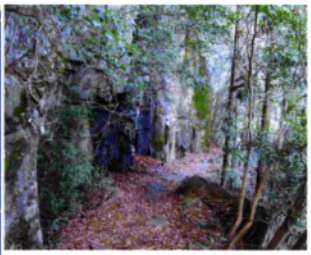

図7　求菩提山千日行回峯道

林内で岩場に沿って行場となっている。大日窟から普賢窟は岩壁そのものが御神体とされる。普賢窟からは，大永七(1527)年の銅板法華経33枚と銅筥が，発見されている。多聞窟と吉祥窟は夫婦とされる。求菩提吉祥窟千手観音為と記された札が，平成十四年のほか，平成十一，十年のものが納められているがいずれ師走である。さらに阿弥陀窟の五窟がある。

NII-Electronic Library Service

Toyama University

図9 波上宮・護国寺

那覇市若狭の海岸の崖上に，波上宮が鎮座する。この地で，ニライカナイの神々に日々の祈りが捧げられていた。王府が熊野三神を祀り，明治23年に官幣小社となる。那覇港の出船は航路の平安を祈り，入船は公開無事の感謝を捧げた。

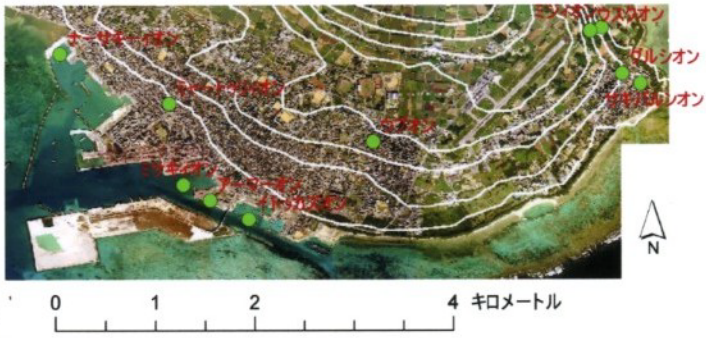

図10 石垣市と御嶽，寺院

石垣市街にある権現堂は八重山では最も古く，桃林寺とともに慶長十九(1614)年に創建された。門，拝殿，神殿から成り，熊野権現を祀る。石垣市街から北西に5km余，富崎の観音堂は，海岸から高さ50mほど上に建つ。桃林寺の別院で，開基の頃から観音を祀るが，神社の様式を含んでいる。参道の階段の両側には，大きな石灯籠が60基ほど並ぶ。境内にはハスノハギリ，松，ブーゲンビレアなどがある。拝殿の奥に本堂があり，さらに巨木と巨石が鎮座している。拝殿手前右側に井戸があり，手押しポンプがつけられて，現在も使用される。背景の空中写真は，スカイビュースケープによる。

図11 石垣の豊年祭 (左)

登野城，大川，石垣，新川の御嶽でのオンプーリィでは，収穫感謝の御神酒(うふみしゃぐ)パーシィが行われる。翌日には新川の真乙姥御嶽でムラプーリィが行われ，標旗(しるしばた)を先頭に，ハナングミ(田頭(たーかしら))，カザリィグシ(矢頭(やーかしら))の旗頭が続く(櫻井徳太郎，1997；結城登美雄，2003)。

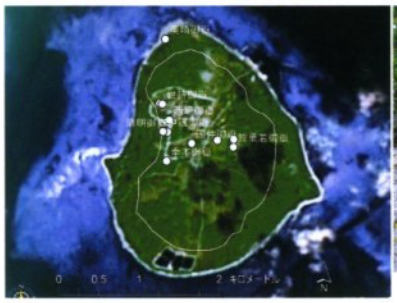

図12 竹富島の御嶽

石垣島の西方海上5km余の竹富島は，集落は島の中心で標高10数m付近にあり，中にンブフルという高台がある。牧草地が広がるが，現在は米を作らず，泡盛もない。背景の空中写真はGoogle Earthによる。図15も同様。

図13 竹富の幸本御嶽

ウブの中に細い葉がしきつめられている。参道から右に直角に折れ曲がって拝所，ウブが作られる。拝所手前に高さ7～8m，直径6～7mの円形の高台がある。ここにも喬木があり，根元に珊瑚礁を逆さにして作った香炉が置かれる

図14 西表祖納の御嶽

祖納の西表小中学校の校庭に沿って，ウブ御嶽，パナリ御嶽が並ぶ。また高台にウチケー御嶽，海岸にクク御嶽がある。

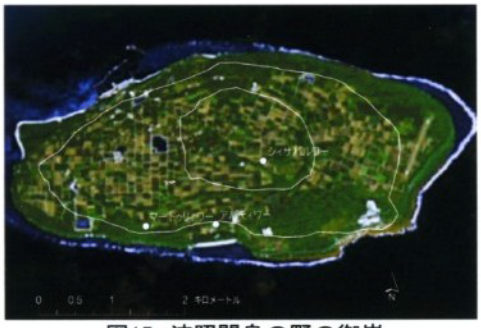

図15 波照間島の野の御嶽

石垣島と西表島間は水深の浅い珊瑚礁の海であるが，モクマオウとギンネムに覆われた隆起珊瑚礁の島が点在する。石垣市の南西50kmにある波照間島は最も南に位置する。波照間島は東西に長く，約6kmある。

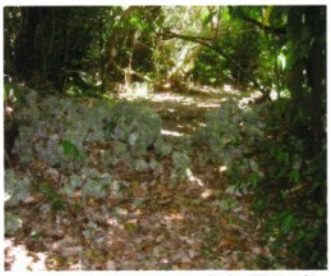

図16 波照間の白郎原御嶽

現在は農道で囲まれた200m×500mほどの広さの森である。熱帯性の樹木が鬱蒼と茂り，その中に幅1mの道が入って高さ3mほどの空間を作っている。道には20-30cmほどの珊瑚礁の石が敷かれ，ところどころで分岐する。高さ40-50cmの石垣で囲まれた，数m四方の空間がいくつかある。祭祀の址はみられない。

NII-Electronic Library Service

Toyama University

神楽の里椎葉村と札所

宮崎県東臼杵郡椎葉村は，九州の中央部に位置し，その神楽は無形文化財に指定されている。霊場は修験とかかわるが，山伏神楽や法印神楽なども修験とかかわるものである。

椎葉村では険しい山脈の中を多くの谷が貫き，人口密度はわずか7人/km²である。公共交通はバスで，中心集落の上椎葉から耳川を下った日向市まで，日に5便があるのみである。村内には，川の口・尾向・仲搭・間柏原・不土野の各線があるが，日に1〜4便と限られる。

椎葉村にある6寺は，いずれも浄土真宗本願寺派である。神社は10社あり，いずれも11月か12月に例祭が行われる。上椎葉にある椎葉厳島神社のように，平家落人のための勧請といわれる。現在は12月初めの週末に，各集落で神楽が奉納される。また1月には，火伏の宇奈間地蔵に代参してお札をもらい，翌日全員に配るなどの風習がある。

上椎葉の中心部には，九州八十八ヶ所縁の仏がある。また，弘法大師の札所三十三番がある。ただし，村外と結ばれるような霊場の札所はみられない。祭祀も平野部のような五穀豊穣祈願が中心ではなく，また山岳信仰の修験とも，基盤を異にするようすがみられる。

3. 沖縄諸島

王府と東御廻り

沖縄では，祖先にまつわる聖地などを廻る風習は，琉球王朝の頃から伝えられている。代表的なものが東御廻りである(図8)。

中山王国では東方海上の太陽の上る久高島，第一尚氏では発祥の地の佐敷付近，第二尚氏では知念森城が，重要な祭祀場であった。国王は，一年おきに久高島，または拝所を巡った(湧上元雄，2000)ことにもとづいている。

首里の南東12km余，島尻郡知念村の海岸段丘上に斎場御嶽がある。巨岩が組み合わさり，珊瑚礁石灰岩が雨で融解して滴る様を呈する。琉球王国関連の世界遺産の一つとされ，イビ(神域)である大庫理，寄満，三庫理は，首里城内の部屋と同様によばれている。斎場御嶽は島尻の東端に位置し，東方海上に遙拝される久高島は，麦の発祥地といわれる。

図8　東御廻り

東御廻りでは，まず首里城歓会門の前にある園比屋武御嶽に拝する。東に向かい，与那原の御殿山に至るが，久高島へはここから船出し，またお新下りでは水撫の儀式が行われる。さらに御子の産井の親川，尚巴志の祖父の故地である馬天御嶽，尚巴志の故城である佐敷城，太陽神の降臨地のテダ御川を経て斎場御嶽に至る。その後知念城，稲発祥の地の一つ知念大川を巡る。さらに6kmほど南西にある稲作発祥の地の受水・走水，アマミキヨの上陸地のヤハラヅカサ，同仮住まいの地の浜川御嶽，同安住の地のミントングスク，同城の玉城城を経て，首里に戻る。

この斎場御嶽では，聞得大君のお新下りが行なわれてきた。朝首里の園比屋武御嶽を参拝し，夜9時ころ斎場御嶽に到着する。夜半に聞得大君の即位式が行われ，午前3時ころ仮泊し，8時ころ神歌がある。夜8時ころ，首里に帰着する。

寺院と御星巡り

那覇市若狭の海岸の崖上に，波上宮が鎮座する(図9)。この地は花城あるいは端城といわれ，ニライカナイの神々に日々の祈りが捧げられていた。王府により熊野三神が祀られ，明治23年には官幣小社となった。那覇港からの出船は航路の平安を祈り，入船は公開無事の感謝を捧げた。波上宮に隣接して，別当寺の波上山護国寺がある。正平二十三(1368)年に，薩摩国坊之津一乗院の頼重上人が開山した，高野山真言宗寺院である。

この護国寺には，十二支の方位の神々が安置され，那覇十二ヶ所の御星巡りがされる。首里十二ヶ所の御星巡りでは，十二支の方位の神々が安置されている首里の慈眼院，万松院，盛光寺，安国寺，西来院をまわる。また久志，金武，知名，伊波，奥武にまつられた五穀の観音を巡拝する(渡

NII-Electronic Library Service

Toyama University

口初美，1990)。

護国寺本堂には，読経する年配の婦人達がみられる。御星巡りは寺院また神仏を巡拝するものであり，王や神女，また門中で行う巡拝とは異質である。

4. 先島諸島

石垣の豊年祭と巡行

さらに先島では，霊場といわないが，年中行事で巡行がなされる。石垣島の南西部に，石垣市が位置する(図 10)。市街の中心部に臨済宗妙心寺派の桃林寺があり，隣接して権現堂がある。地元の人によれば，葬式は桃林寺の坊さんが行い，初詣には西方にある富崎観音に行き，また御嶽は鳥居があるから神社で神主もいるはずという。島外での行先は，沖縄本島や東京のディズニーランドなどが多いが，巡礼の話はなく，また至近の台湾には行くことはあまりないが，台湾からは来るという。なお観音堂は，桃林寺の別院である。

石垣市街には，公儀御嶽の美崎御嶽がある。長田大翁主の姉妹あるいは娘で，大阿母を辞退し永良比金となった真乙姥の建てた拝所で，境内の火の神御嶽は，西塘が 1524 年に竹富島に勧請したものを移した。天川御嶽は村公事御嶽である。明和八(1771)年の大津波の前には，野佐真親霊上がそのイベの霊石を信仰していた(牧野 清，1975)。市街の海寄りに船着御嶽があるが，かつては付近までが海だったという。山寄りの宮鳥御嶽は境内が広く，鳥居を入ると前庭，拝所，奥の院前，奥の院があり，最奥に巨木その前に石が立てられ，石板がわたされている。

真乙姥をまつる真乙姥御嶽では，四ヶ字という石垣中心部の 4 集落が集まり，五穀豊穣の豊年祭が行われる。平成 15(2003)年は，前日の各字の御嶽でのオンプーリィに続き，7 月 20 日にムラプーリィが行われた。15 時半に各字から集まり，まず祝典が行われた。

続いて旗頭と巻踊りが奉納された(図 11)。旗頭を先頭にした集団は，新川字会，双葉公民館，大川字会，石垣字会，登野城字会，新栄町自治公民館，JA おきなわ八重山支店，石垣島製糖株式会社，石垣市役所農林水産部，八重山農林高等学校などであった。旗文字には瑞雲，慈雨，五風十雨など天候の順調や豊穣を祈願するものが多い。拝殿に座る神司の前で，婦人達が巻踊りを奉納する。3 番目の，五穀の種子授けの儀では，それぞれ板上に乗り，面をつけた神から神司に種子籠が渡される。最後に貴婦人綱，ツナミヌン・大綱引きが行われた。祭祀の間，御嶽に神司が座して奉納を受け，女性を中心にした祭りである。その後 22 時に各字の御嶽に戻った。

竹富の御嶽と年中行事

石垣の西，竹富島からは黒島・新城島と同様，西表島東岸の水田に出作りし，波照間島にも水田があって，農耕が中心であった(中鉢良護，2002)。竹富島には，御嶽が 28 あるといわれる(図 12)。中心の集落に西塘御嶽があり，付近に波座間御嶽，世持御嶽が並び，また弥勒奉安殿がある。そのやや南寄りに清明御嶽や仲筋御嶽がある。清明御嶽には最初の天降り神の清明加那志が祀られ，雨乞い儀礼や年中行事はここから始められるという(石垣博孝，1982)。旧暦八月八日の世迎えに，根の国から神々が来て，中央の小波本御嶽に入り，小高い小城場御嶽に登り，穀物の種を配る(外間守善，1992)。

さらに幸本御嶽がある(図 13)。集落の東側には国仲御嶽があり，拝所，ウブは数 m 四方に白砂が敷き詰められ，奥に神石，神木，香炉，花立，蝋燭立，茶碗が置かれる。

島の北海岸に，美崎御嶽がある。喬木の森の中に，神の宿る最も神聖な場所であるウブと，司が神に祈るため夜籠りをする拝殿がある。ウブの海側延長上に，海を望んでもう一つの拝殿がある。ここで，海上の平安が祈願される。島の西海岸にあるマーチ御嶽は鳥居を備え，ウブは珊瑚礁の岩が 2 段に分けて積み重ねられるが，その前に香炉が置かれるのみである。

中心集落の東方の原には，規模が大きく広い御嶽がある。久間原御嶽は入口から参道が直線状に伸び，先でやや右に曲がる。拝所の真ん中から奥に大きなウブがあり，ウブを望む穴が右側に開けられる。また花城御嶽は，参道の正面から右側に東向きのウブがある。花城御嶽の向かいに波里若御嶽がある。参道は南に向かい，先で東に

NII-Electronic Library Service

Toyama University

向いて拝所に入り，さらに北に向いてウブがあり，180度回った形になる。

竹富島の御嶽には，隣接して高台がみられる。また竹富島のほか波照間島でも，墓地は島の西側にある。

西表の御嶽と豊年祭

竹富島の西，西表島の北西部の宇那利崎付近に，新しい入植地の住吉の集落がある。半島の先端部には気象観測所があり，付近に西美崎御嶽があった。かつては拝所も点々とあったというが，現在は廃屋となったホテル，ゴルフ場などの跡が残るばかりである。事業をはじめても次々と失敗するのは，拝所をつぶすせいではないかといわれる。集落の入口には，住吉神社の扁額をつけた鳥居が建ち，その奥の斜面上部には背丈ほどのコンクリート製で，正面が数10cmほどくり抜かれた建物が置かれる。ここも拝所とよばれ，高齢者が参るという。

住吉の南，河口から上流に8kmもマングローブが続く浦内川があり，さらに南には御嶽が多数分布する。海岸にある干立御嶽では，平成15年には，石垣と同じ19・20日に豊年祭が行われた。初日は午後3時からプリヨイ，二日目は午前8時に網かけ，午後5時に御嶽に集まり，午後8時から村中央でミナタ儀式が行われた。

その南の祖納は，慶来慶田城氏に縁の地で，多くの御嶽がある。とくに西表首里大屋子の用緒の墓に隣接するクク御嶽は大きく，内部は森を模したように曲がりくねった道が続く(図14)。また海岸の防波堤にもウブが置かれ，珊瑚礁から外海への出口が望まれる。なお祖納当は1510年に与那国与人に任ぜられた。さらに西表中学の東側に，ウブ御嶽，離御嶽の鳥居が並ぶ。拝所があり，奥にウブ，イビが続く。

波照間の大祭と神道

波照間島は石垣や西表ほかの島々から，南方に離れた位置にある。島の周囲は緩斜面で，中央部が平坦地となっている(図15)。島の中央の高度40mほどには，北，南，前，名石とやや西に離れた富嘉の集落がある。その中心に長田御嶽などが位置する。10m四方が珊瑚礁石灰岩で囲まれ，正面から少し左に香炉が置かれる。手前に深さ7-8mの井戸がある。

御嶽には内の御嶽と，その拝所となる畑の御嶽がある(櫻井徳太郎，1997)。波照間島の祭りでは，各地区から3つの畑の御嶽まで，神道を神女が巡行する。また神道には，旧村の跡が組み込まれている(中鉢良護，2002)。

集落の東方，島の最高所(60m)に，畑の御嶽の一つ，白郎原御嶽が位置する(図16)。島の南側斜面には，阿幸俣御嶽があり，畑の中に森として残る。その西側に真徳利嶽があったが，森は確認できなくなっている。

これら畑の御嶽の周囲は，平坦ないし緩斜面で，樹叢を特色とする。一方，藩政期には火番盛という，数mほどの高台が作られた。これは御嶽ではないが，上部には香炉と供え物が置かれている。

Ⅲ　霊場と信仰施設

1. 札所の偏在

九州では，近年多くの霊場が開創された。その一つ，九州八十八ヶ所霊場は，博多にある密教の東長寺より始まり，宗像大社の別当寺であった鎮国寺に至る。昭和59(1984)年に開創され，すべてが真言系寺院である。道のりは2063kmに達する。修験の地の篠栗では，十番切幡寺，十四番二ノ滝寺，四十三番明石寺，六十一番山王寺が加入したという(野見山覚応，2002)が，現在は第九番明王院，番外の金剛頂院が同霊場に含まれている。

九州三十六不動霊場は，六郷満山の修験の両子寺にはじまり，九州八十八ヶ所発願でもある東長寺にいたる。昭和60(1985)年に開創された。1番から7番までが，国東半島にある。みちのりは1344kmである。

九州二十四地蔵尊霊場は，すべて真言系寺院からなる。昭和61(1986)年に開創された。北九州，筑後，西海，筑前の各六地蔵尊霊場からなる。道のりは446kmである。

九州四十九院薬師霊場は，太宰府の国分寺から佐賀県基山町の大興善寺に至る。平成11(1999)年の開創である。道のりは1585kmである。

歴史の古い九州西国霊場は九州北部を巡り，九州南部は含まれない。近年開創された大師，不動，

NII-Electronic Library Service

薬師霊場はいずれも九州全域を巡るが，発願・結願の地は，福岡県に4ヶ所，大分県と佐賀県に1ヶ所づつで，みな九州北部にある。また九州北部である大分・福岡・佐賀・長崎県内の札所は，大師霊場で93ヶ所中64，不動霊場では36ヶ所中25，薬師霊場で49ヶ所中34と，九州北部を中心としている。なお地蔵霊場は九州北部のみを廻る。

2. 寺院宗派と地域の宗教基盤

地方霊場には開創の頃から寺院が深くかかわっており，地方霊場の地域的な差異には寺院宗派の分布とのかかわりが認められる。『全国寺院大鑑』(全国寺院大鑑編纂委員会，1991)より，寺院宗派を天台，真言，浄土，禅，日蓮などの系に分けて，西南日本の現在の宗派別寺院分布を示す(図17)。

四国，とくに瀬戸内には，多数の真言系寺院が展開しており，九州北部でも同様である。讃岐は弘法大師縁の地であり，また上記の地域には石鎚山や英彦山などの修験の山岳も含まれている。一方中国西部や南九州では，現在は天台系や真言系寺院は少なく，浄土系寺院が多い。とくに薩摩藩境では托鉢，六部，念仏者の一宿が禁じられていたといわれ，明治の廃仏毀釈後に浄土真宗が展開している。

同様にして宗派は開基や展開が異なるため，霊場開創と現在の宗派分布とに相異がある。霊場と直接かかわることが少なかった浄土真宗の場合，およそ以下である。親鸞(1173-1162)が開いた後，二世如信は北関東で念仏を広め，さらに東北地方に達した。親鸞聖人が下野国芳賀郡高田に至った後，門弟の真仏らが浄土下野流，専修門流高田宗等をなし，専修寺系の真宗高田派となる。また，五世綽如，六世巧如，七世存如らは北陸に教線を広げ，八世蓮如は文明三(1471)年から4年間吉崎に移った。

西南日本では14世紀初めに，京都仏光寺六世の明光一派が，現在の広島県沼隅郡沼隅町に光照寺を興した。安芸でも明応五(1496)年に，仏護寺が真宗に転じたが，この年には石山御坊も建立され，西国布教が始まる。真宗興正派は，親鸞が山科に建立した興隆正法寺を中心とするが，興正寺二世の蓮秀は西国を巡遊して教化に努めた。仏護寺は毛利・福島氏の庇護を受け，信長の石山攻めの際には，門徒衆は毛利氏とともに戦い，安芸門徒と呼ばれるようになる(友久武文，1998)。なお慶長二(1597)年に准如が十二世となり，浄土真宗本願寺派(西本願寺)，慶長七(1602)年にはその兄教如は真宗本廟(東本願寺)をなすが，安芸では興正寺門末に連なり，浄土真宗本願寺派が多い。

3. 沖縄の寺社の導入

地方霊場では，札所は寺院のみならず，神社に置かれることも多い。とくに神仏習合の地においては，寺社は明瞭に分けられることはなかった。沖縄には宗教法人としての寺院や神社は少ないが，寺社の間に，特有の関係がある。

沖縄では，一つのムラに御嶽，廟，寺院，神社があり，さらに祠堂に観音をはじめ，荒神，地蔵，賽(せーぬかん)の神，恵比須，賓頭盧(びじゅる)，聖石，弥勒(みるく)，土帝君，焚字炉などがまつられる(平敷令治，1990)。沖縄には，宗教法人として11神社があり(全国神社祭祀祭礼総合調査本庁委員会，1995)，那覇市に9社，また宜野湾市と平良市に各1社がある。また『全国寺院大鑑』によれば，沖縄では現在51寺院があり，沖縄に44と先島に7である(図18)。

宗教法人化されていないものも含め，17の主要社があげられている。とくに琉球八社という官社があり，波上宮，沖宮(おきのぐう)，八幡宮，識名宮，末吉宮，天久宮(あめくぐう)が那覇市に，普天間宮が宜野湾市に，金武宮が国頭郡金武町にある。波上宮をはじめ，識名宮，天久宮，普天間宮，金武宮など，洞窟に古来の神を祀って祠が作られ，かつては葬地であったところが多いという。末吉宮は丘陵の頂部にある(加治順人，2000)。

神社の開創は14世紀の波上宮に始まり，15世紀に最多となり，17世紀まで続いた。これは中山王国から琉球王国の頃で，慶長十四(1609)年の薩摩入りまでである。なお後の大正末に県社沖縄神社，昭和に入り護国神社が開創された。また，古い神社などは，権現，権現堂などとよばれ，熊野神をまつるところが多い。ほとんどが寺院を併設するが，琉球八社の併設寺院はみな真言宗である。一方離島などでの併設寺院には，臨済宗が多い(表1)。

NII-Electronic Library Service

Toyama University

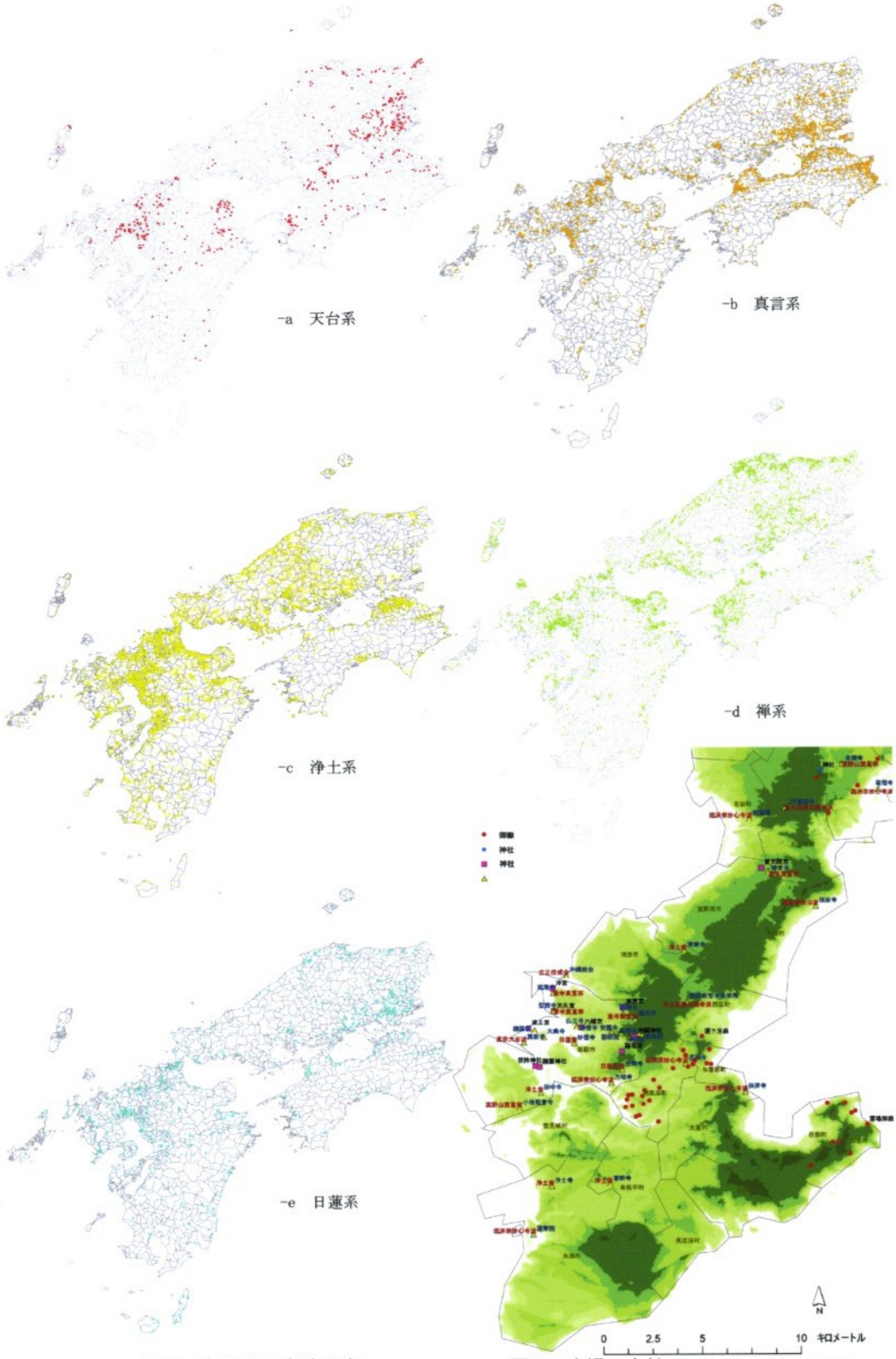

図17 宗派別の寺院分布

図18 沖縄の寺社 主要な寺院，神社と御嶽

NII-Electronic Library Service

Toyama University

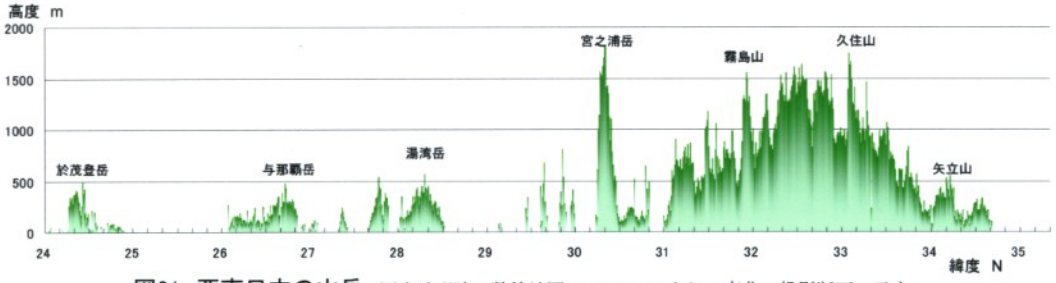

図21 西南日本の山岳 国土地理院の数値地図1kmメッシュより，南北の投影断面で示す。

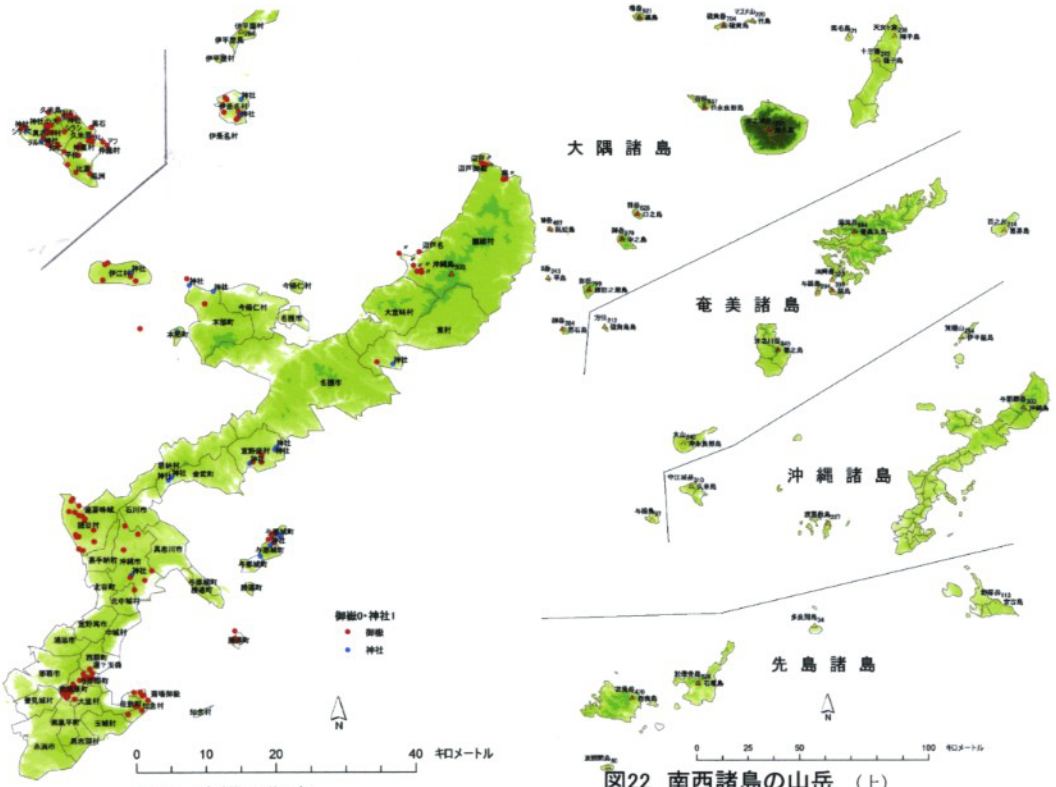

図19 沖縄の御嶽

沖縄各地の御嶽の調査(沖縄県教育庁文化課，1984)，久米島での御嶽の調査(大城 学・仲村昌尚・朝比奈時子・安里秀正・西表 宏・島尻克美・島村幸一・波照間永吉，1983) から分布を示す。拝所(うがんじゅ)は座間味島に134，阿嘉島に28，慶留間島に11がある(宮里勇清・大村太郎・金城信盛・知念 繁，1989)。

図22 南西諸島の山岳 (上)

図21で北緯31度以南の大隅，奄美，沖縄，先島諸島の各島における主峰と高度を示す。

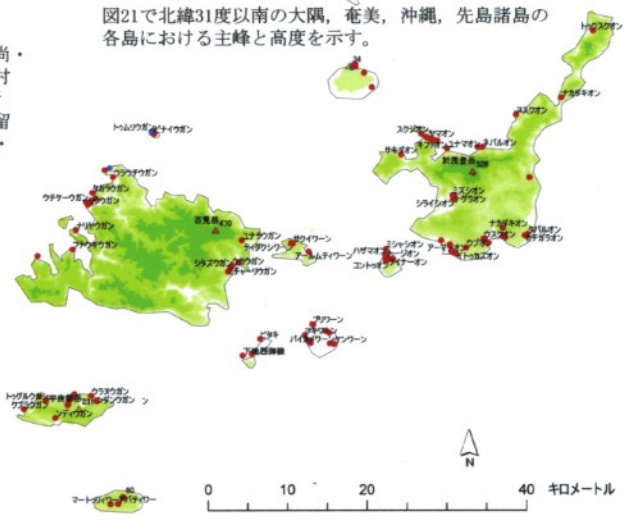

図20 八重山の御嶽 (右)

八重山は石垣・西表両島のほか，竹富，黒，新城(あらぐすく)(上地・下地)，波照間，小浜，由布(ゆぶ)，鳩間，内離(うちばなり)，与那国の小島からなる。雨乞いはされるが，台風を忌避する儀礼はない。高い山がある高島は「田国島(たんぐんじま)」，隆起珊瑚礁の低島は「野国島(ぬんぐんじま)」といわれる。高島は沼沢のマラリアで廃村もあり，低島から島分け(しいまばぎ)という強制移住をした(波照間永吉，1992)。沖縄各地の御嶽の調査(沖縄県教育庁文化課，1985)から分布を示す。

NII-Electronic Library Service

Toyama University

表1　沖縄の神社　加治順人(2000)より集成

番号	神社	別名	琉球	本庁	設立	祭神	寺院	宗派
1	波上宮	波上権現	八社		1 14c	熊野	護国寺	真言
2	沖宮	洋権現	八社		8 15c	熊野	臨海寺	真言
3	八幡宮	安里八幡	八社		10 15c	八幡	神徳寺	真言
4	識名宮	戸薬那権現・姑射山大権現	八社		9 16c	熊野	神応寺	臨→真
5	末吉宮	末吉権現・大慶山権現	八社		6 15c	熊野	万寿寺	臨→真
6	天久宮	天久権現	八社		11 15c	熊野	聖現寺	真言
7	普天間宮	普天間山宮三所大権現	八社		4 15c	熊野	神宮寺	真言
8	金武宮	金峰山三所大権現	八社		16c	熊野	観音寺	真言
9	住吉神社				17c	住吉		
10	浮島神社				7 15c	天照	長寿寺	臨済
11	宮古権現堂				5 17c	熊野	祥雲寺	臨済
12	桃林寺権現堂				17c	権現	桃林寺	臨済
13	御伊勢堂				16c	天照	照太寺	臨済
14	天満宮				16c	天神	善興寺	
15	沖縄神社				2 20c	舜天王		
16	世持神社				3 20c	具志頭		
17	護国神社				20c	戦没者		

沖縄の神社は僧侶によりもたらされ，神は本地垂迹の権現として受け入れられたという。とくに熊野は神仏習合であり，南海補陀落浄土の観音信仰と海の彼方の永遠楽土であるニライ・カナイ信仰，また黄泉の国の入口である熊野と地底の神霊の通り道である沖縄の洞窟，などの類似性により受容された。臨済宗は王府では神女組織とともに祈願を行っていたが，薩摩入り後には神女らは農耕祭祀，禅家衆は葬儀や供養，真言系寺院・神社の聖家衆は現世利益の祈祷を分掌し，真言宗寺院を併設する宮が官社となった(加治順人，2000)。

なお密教や修験道では，太陽を神格化した大日如来を主とすることも，受容の一因となったと考えられる。また，神社が地名を冠して宮とよばれるが，八幡大菩薩や菅公を祀って八幡宮や天満宮とよぶように，沖縄の神はいわゆる見えない存在の神とは異なる性格が考えられる。熊野三神を祀っても熊野神社とはよばないことも，そこに沖縄の神が想定されているものと考えられる。

石垣の桃林寺には権現堂が隣接するが，宮とはならなかった。むしろ離れた観音堂に初詣され，桃林寺は沖縄での臨済宗寺院の葬祭，観音堂は真言宗寺院の祈願の役割を果たすことが考えられる。

4. 御嶽様式の展開

沖縄では，宗教法人の寺社は少なく，祭祀や参拝は伝統的な信仰施設の御嶽で行われる。御嶽には，かつては神役の者でも必要以外は立ち入らず，せみとり，木の実とり，草刈，薪拾いなどで入るときは，神々に断って入った(沖縄県教育庁文化課，1984)。御嶽は1713年の琉球国由来記には，八重山76，宮古29，沖縄の首里29，島尻247，中頭(なかがみ)210，国頭(くにがみ)143が記されており(色川大吉，1993)，現在も各地に分布している(図19，20)。

御嶽は神社に似るが，宗教法人化された神社は先島では大正14年創建の宮古神社のみである。昭和18年7月，神祇院は沖縄本島の400の御嶽を神社として正式登録を決定したが，八重山までおよばなかったという(喜舎場永珣，1975)。

宮古の御嶽では，実在人物(18.2%)や航海安全の神(6.3%)，また母天太(んまてぃだ)，世の主(ゆーぬぬす)などの天上神が祀られている(松原英治，1992)。八重山の御嶽には，1)祖霊神，島立神，島守神，2)ニライ・カナイの神，航海守護神，3)水元の神，火の神，豊漁の神，牛馬の神，英雄神などが祀られる(波照間永吉，1992)。このように御嶽に祀られる神々は，天津神などとは異なる。

また御嶽には，あしあげ(あしぁぎ)という神楽の場，火の神を祀ったのろ殿内(ぬるとぅぬち)，根上殿内(にがみとぅぬち)に，帯綱(うーびじな)を締めた一画，いべ(いび)の前，岩石や老樹のあるいべからなる(宮城眞治，1937)。現在では御嶽に鳥居が立てられ，神社の扁額も掲げられるが，御嶽の様式は社殿を伴う神社とは異なる。

縄文・弥生文化は沖縄まで伝播したが，八重山(やいま)では13〜14世紀に石器文化から農耕・海外交易が始まった。15世紀末には石垣に長田大翁主(なーたうふしゅ)，石垣島東岸の大浜に遠弥計赤蜂保武川(おやけあかはちほんがわら)，西表に慶来慶田城用緒(げらいけだぐすくようちょ)，波照間に明宇底獅子嘉殿(みょうすくししかどぅん)などが分立していたが，1500年に琉球の支配下となり，1524年から竹富出身の西塘が統治した(新城俊昭，2001)。

14・15世紀の波照間島や竹富島の遺跡は，隆起珊瑚礁の崖上にあって御嶽はないが，後に村は下方に作られて，竹富島では刀禰元の屋敷や井戸が，御嶽となった(小野正敏，1999)。こうした村成立は，石垣市内の平得では，降り井戸，鉄製農器，掘抜井戸への発展とともに，移転の歴史として伝えられる(伊波　寛，1987)。また御嶽は30戸以上の新村に勧請されて子嶽(ふぁーおん)とよばれ，以前には遥拝所・祈願所(31%)，墓・縁故地(20%)であった(牧野　清，1985，1987)。

八重山は外界と接する前後において，非常に変化の激しい社会であるが，この頃に村が作られて

NII-Electronic Library Service

Toyama University

いく。さらに，琉球の勢力圏になってから，それまでの霊地などが，御嶽となっていく。御嶽に類した信仰は，台湾の高砂族にはみられない(牧野清，1985，1987）といい，御嶽も沖縄から伝播したと考えられる。

石垣島の宇本(於茂登)山(525.8m)は，沖縄辨嶽，久米島西嶽の神と姉妹神といわれる(石垣博孝，1982)。さらに，八重山には沖縄から限られた寺院が伝わったが，権現堂は宮とならなかった。また，石垣の四箇村では，明治には石敢当が建てられたが，大正末から自然石のビッチルにかわり，白保の与那岡には直径10数m，高さ5mのビッチュルムリィがある(牧野 清，1986)。

先島ではまた，御嶽も沖縄とは多少異なるが，祭祀制も沖縄とはやや異なる。神司が祝女にあたり，石垣市の四箇では，パカという小字の宗家から選ばれる(櫻井徳太郎，1997)。また，執事にあたるカンマンガーや氏子総代にあたる刀禰元などがいる。嫁は里方また両方の神山に奉祀する(亀井秀一，1990)。

5. 森山と変容

霊場の札所に修験の霊地も多いが，山岳を背景にした自然信仰に類するものが，西南日本にも多数みられる。明治の神社明細帳には，大木，岩，滝などを神実とした，社殿のない神社が多くみられる。現在も西南日本各地で，森や巨木が祀られている。

たとえば対馬では，森山や巨木をまつる地は，天道地，天道山，天道茂，茂地などといわれ，36を数えるが，太陽信仰に密教・修験が付会されたという(図21)。熊本，宮崎以南では，タブの大木を祀って，モイ(森)ドン，モリドン，モイヤマとよび，鹿児島県には100ヶ所以上ある(岡谷公二，1987)。

種子島には伽藍山として敬われる，村落を中心にした森山と泉が，176ヶ所ある(下野敏見，1981b)。種子島南部の宝満神社では，社殿，鳥居，潟内に標高12mの御田森が並び，椎などの根元に珊瑚のガロ石を重ねた祭壇に，ガローを祀る(森弘子，2002)。ガロー神は，8世紀より仏寺の守護神となる(岡谷公二，1987)。種子島では修験者は1460年代初めまで活動し，その後法華宗が密教と密着して広まった(下野敏見，1981a)。

屋久島から吐噶喇の島々には，御岳がそびえる(図22)。7世紀頃から修験道が入り，春秋の彼岸に岳参りがされた。頂上近くの岩陰に木製の厨子をおき，笹潮花，焼酎，浜石を供え，内侍と太夫が祝詞をあげる。また御岳権現は伽藍のコバミヤにも祀られ，詣り所といわれる。霜月祭りでは，御岳の神と平地の神の交合儀式や神楽がある(下野敏見，1981a)。小さな鳥居と祠のある森は神山といわれる。この地域でいう内侍は，根人の姉妹でノロの下位の根神(岡谷公二，1987)であり，沖縄の影響がある。

奄美諸島では岳のほか，カミ山・ウガン山・オボツ山があり，産土神の山である。またその下方には古い埋葬地を伴うテラ山や権現山がある。村には宮(庭)に，ノロの足一騰宮と，古層の神を祀る刀禰家がある。奄美諸島は1441年から琉球王朝下となり，ノロは首里の聞得大君に拝謁した。薩摩藩は神山などを開墾してサトウキビ畑とし，ノロの首里への拝謁を禁止したが，加計呂麻島などにノロは存続した(下野敏見，1981a，b；岡谷公二，1987)。

地域により多少異なるが，山の聖地は高さにより，1)高山である御岳，2)低山である神山・オボツ山，3)森であるモイドン・伽藍山，に分かれる。集落付近の森の聖地は，いずれの地域にもみられる。北方から修験道の影響は高山のあるトカラまで強く，南方の沖縄からの影響は奄美，トカラまでみられる。

Ⅳ　霊地と巡拝の検討

1. 聖跡の巡拝

現在南西諸島においては，霊場とよばれるものはないが，先述のように王朝のころから聖地が巡拝されてきた。そのため南西諸島において，霊場開創の要因を検討できるものと考えられる。

沖縄において，士族層の門中神拝みは，故地の城跡，居住址，墳墓，井，御嶽，拝所旧蹟などの巡拝から始まり，東御廻りが中心であった(湧上元雄，2000)。

NII-Electronic Library Service

Toyama University

今帰仁上りは，今帰仁廻りともいわれ，東御廻りと似ている。国頭郡今帰仁村にある今帰仁城，クバの御嶽，解きの岩屋，津江口の御墓，赤御墓，ウーニシ墓，百按司墓，為朝上陸碑，テラガマなどを拝する(沖縄の習俗研究会，1986；涌上元雄・大城秀子，1997)。東御廻りでは 40km 以上，今帰仁上りでも 20km 以上を廻ることになり(図 23)，宿泊が必要なことがある。これは霊場に類するが，さまざまな聖地が巡られる。

図 23　今帰仁上り

高台にある今帰仁城内のカラウカーなどに始まり，琉球七御嶽の一つのクボウの御嶽を経て，海岸の今泊集落付近の殿内や墓などを廻り，運天の源為朝伝承のある墓や拝所を経て，勢理客ノロ殿内に至る。

2. 神事と巡行

波照間の祭りでは，神女らにより巡行が行われる。大祭では，旧村跡を組み込んだ神道を，司らの女性がマトゥルワーの立石とミシクゲーの二手に分かれて拝んでまわる。ヌブリ(風鎮め)では儀礼後に水と粥を供えに行き，ヒーブリ(各ウガンの風鎮め)では家を廻る儀礼と水マチのほか，ピテヌワー内の立石，ペムチ浜と周辺数ヶ所で呪文(オルル)と拝礼を行う(中鉢良護，2002)。

また，ユタは御嶽の巡礼も行うという(高野洋志，1992)。沖縄の巡拝の発祥には，為政者による祭祀があった。八重山では 13〜14 世紀における農耕伝来を伝え，農耕社会の儀礼として，神司を中心に巡拝が行われる。沖縄ではさらに，一般の人々も巡拝をし，さらに祭事とは別にレクリエーションを兼ねて巡拝されるようになるが，八重山では限られた行事である。

3. 季節祭と巡拝

季節行事として，祭礼で近隣の聖地が巡拝される。三月の神御清明では二手に分かれて，門中の古墓などを巡拝するアジシー拝みと，第一尚氏三代の王の墓を拝む読谷山行きをする。五月の三日崇べ，五月御祭，六月御祭でも，各ヌカーなどが巡拝される。また首里拝み，佐敷拝みがある。九月御願では，川拝みと安里八幡拝みを分かれてする。旧暦一月七日の浜川拝みや八月の水撫で，受水走水などが巡拝される。御水撫，井泉拝では，先祖ゆかりの御嶽，グスク，根所などを拝んで水が持ち帰られ，東，南，北の井泉が巡られ，大里村や西原町の西廻りもされた。水撫には，祖霊信仰，血縁共同体，古い村落祭祀，門中祭祀などがかかわっている(湧上元雄，2000)。

平成15(2003)年 7 月 14 日(旧六月十五日)に，豊見城市字嘉数の拝所で六月御祭が行われた。自治会役員，大屋，大殿内，真地の各門中の人々ら約 20 人が参加し，瓶子などを持って集落内の 21 ヶ所の拝所など計 25 ヶ所を巡拝した。六月御祭は豊年祭と健康祈願であるという(長嶺中学校，2003)。霊場は比較的小規模であるが，血縁集団の祖先に縁の地を巡拝するとともに，社会で共通の聖地への巡拝が組み合わされている。

4. 回峰と修験

山地でも祭日において，巡拝される。座間味島では旧暦九月下旬に，3 部落の人達が早朝に阿真のシタシムイで祈願し，島の東部から北部にある大御嶽(161m)，小御嶽，仲御嶽，赤崎御嶽に御嶽登りし，さらに御嶽ホサゲという祈願立ホドキをする(宮里勇清・大村太郎・金城信盛・知念繁，1989)。

本来，山々は基層で生活とかかわり，荘厳な神々の山とともに，人里近い端山も信仰の対象とされていた(野本寛一，1998)。比叡山は磐座や横穴式古墳が多数分布して山王神道の源泉であった。そこで行者たちは山林修行を始め，最澄も山林修行の後に国家仏教を樹立しようとした(佐藤弘夫，2003)。

このように山林は神仏と不即不離であるが，こうした地に山岳信仰の修験が発展してきた。修験は，霊場の開創と深くかかわるが，それには修験での山林抖擻による修行がある。薩南諸島などでの森山には，霊場は発展していない。

NII-Electronic Library Service

Toyama University

5. 神仏習合の要素

霊場の札所には，神仏習合の寺院が多くみられ，修験道においても，神仏は習合している。本来神仏の中でもとくに，インド伝来の観音の属性に適合する日本の自然崇拝の現象が選択され，その自然神の像の上に観音の形象が重層されていった(中村生雄，2000)。また神仏は本地垂迹思想で融合するが，神像は稀で仏像は多いのに対して神仏を反転し，仏菩薩は衆生済度のため仮に神として現れたとされた(堀越光信，1998)。

いずれにしても，岩・水・樹を含む山林の，古層の信仰の上に，外来の神や仏が加わることによって奥行きと広がりが拡大し，霊地に普遍性が付与される。これらは霊場が発展する要因と考えられるが，南西諸島では，多数の信仰が混在するものの，習合とは異なるようである。

6. 寺院霊場と聖地

本来霊場は，巡礼の札所だけでなく，墓地なども意味している。空海は自体で完結する根本道場を構想したが，高野山には空海を祀る奥の院が加えられ，霊場となる。また奈良の元興寺極楽坊では，念仏講や納骨が行われ，平安時代後期から廟所を中心に霊場が形成された。近世には，霊場は死者が永遠に安眠する地となった(佐藤弘夫，2003)。

そのため，巡礼の札所が発達するには，山林のみならず都市の信仰施設の周辺に聖人や祖先が祀られて，新たに聖地や霊場として意識されることも，要因の一つとなる。霊場は九州でも南部には少なく，さらに南西諸島に少ないのは，寺院が九州から入り，開祖などの聖人の霊場とは遠いことなども影響していると考えられる。

V　おわりに

本研究では，西南日本の霊場巡拝の実例を調査し，信仰施設とその変容について一般的に明らかにし，さらに霊場成立の要因について検討を加えた。西南日本各地には，全てを表す三十三や，山並みや末広がりを示す八十八の札所をもつ霊場が開創されてきた。そこには地主神や仏神など多様な神仏が祀られ，社寺から森山まで信仰施設の様式は多様である。また，祖先の墓参りから社寺や霊山の巡拝などが行われている。こうした巡拝，信仰施設，霊場の研究の主要な成果は，以下のようにまとめられる。

中国・四国から九州北部では，霊場の開創伝承などが示すように修験との結びつきは深く，札所も山地周辺に位置している。四国霊場では発願・結願の札所が四国東部におかれて，満願後に高野山に参るなど，密教との結びつきは深い。九州西国霊場でも，修験の山からはじまる。一方，九州南部の宮崎・熊本・鹿児島では，近年にいたるまで，霊場は限られていた。沖縄では，王府による巡拝が行われ，現在では民間の巡拝習俗も盛んである。先島では，祭祀の神事・奉納行事として，巡行がなされる。

近年いくつかの九州全域を巡る霊場が開創されたが，九州南部には札所は少なく，霊場には地域的な差異が大きい。また寺院宗派分布からは，とくに密教系宗派と霊場とのかかわりが示される。沖縄では王朝時代に社寺として，権現や密教などが導入され，伝統的な信仰と習合した。先島でも，琉球の勢力圏に入って以来，当時の祭祀施設が御嶽となって存続した。また九州南部以南から大隅諸島・奄美諸島では，森山の信仰が多数残る。また大隅諸島では高山のある島では修験の影響がみられ，奄美諸島では琉球の影響が祭祀制に残る。

このように西南日本各地では，霊場と巡拝の習俗と，信仰施設など宗教的基盤に，地域的差異が大きい。これらの検討に基づいて，霊場成立の要因を以下のように考えることができる。まず，為政者により開祖などの聖蹟巡拝が，政の一環として行われる。また各地でも，祖先の聖跡巡拝が祭祀の神事として行われる。さらに地域共同体などでも，祭政を模して聖蹟巡拝を行い，民間の季節行事としても行われるようになる。ところで密教や修験では山林抖擻するが，回峰修行は巡拝の基礎となって霊場開創に結びつく。また神仏習合が進むことにより，霊地は普遍性を得て，霊場の発展が促進される。さらに寺院内霊場は，極楽への入口として霊性を付与され，霊場の発展につながった。

NII-Electronic Library Service

Toyama University

上記のような霊場と巡拝の変化があったとすれば，これらは熊野詣から西国霊場や四国霊場に展開したことに相当する。そのため，西南日本における霊場の地域的差異は，時代的な展開の差異としても理解されるものと考えられる。

謝　辞

本研究では中国・四国・九州・沖縄地方で実地調査を行った。多くの地元の方々から貴重なご教示をいただいた。記して感謝する次第である。

文　献

石垣博孝(1982)：八重山オモト山の神について．南島史学会編『南島－その歴史と文化－4』第一書房，117-142.

伊波　寛(1987)：伝承に見る平得村の村落移動．八重山文化研究会『八重山文化論集』ひるぎ社，59-77.

色川大吉(1993)：御嶽信仰と祖先崇拝－八重山群島石垣島の場合－．東京経済大学人文自然科学論集，94，150-162.

大城　学・仲村昌尚・朝比奈時子・安里秀正・西表　宏・島尻克美・島村幸一・波照間永吉(1983)：『琉球国由来記』所載久米島御嶽の現状．沖縄久米島調査委員会編『沖縄久米島資料編』弘文堂，441-464.

大路直哉(2001)：『日本巡礼ガイドブック』淡交社，270p.

岡谷公二(1987)：『神の森　森の神』東京書籍，205p.

沖縄県教育庁文化課(1984)：『御嶽　御嶽信仰習俗分布調査(Ⅰ)－沖縄本島及び離島－』沖縄県教育委員会，107p.

沖縄県教育庁文化課(1985)：『御嶽　御嶽信仰習俗分布調査(Ⅱ)－宮古諸島及び八重山諸島－』沖縄県教育委員会，239p.

沖縄の習俗研究会(1986)：『門中拝所巡りの手引き－沖縄霊地の歴史と伝承－』月刊沖縄社，150p.

小野正敏(1999)：密林に隠された中世八重山の村．国立歴史民俗博物館編『村が語る沖縄の歴史－歴博フォーラム「再発見・八重山の村」の記録－』新人物往来社，37-68.

加治順人(2000)：『沖縄の神社』ひるぎ社，176p.

加原耕作(1980)：神社祭祀．落合町史編纂委員会『落合町史民俗編』535-613.

亀井秀一(1990)：『竹富島の歴史と民俗』角川書店，512p.

喜舎場永珣(1975)：『新訂増補　八重山歴史』国書刊行会，471p.

求菩提資料館(2002a)：『求菩提資料館』求菩提資料館，28p.

求菩提資料館(2002b)：『求菩提山麓の仏たち』求菩提資料館，12p.

櫻井徳太郎(1997)：八重山における近代化と民俗宗教の変容．宗教研究，71，1-30.

佐藤弘夫(2003)：『霊場の思想』吉川弘文館，193p.

下野敏美(1981a)：トカラ列島の山岳信仰と修験道文化－修験道の南下とその受容－．下野敏美『南西諸島の民俗Ⅱ』法政大学出版局，106-128.（初出：隼人研究，6，1979年）

下野敏美(1981b)：ガロー山をめぐる諸問題．下野敏美『南西諸島の民俗Ⅱ』法政大学出版局，129-164.（初出：鹿児島短期大学　南日本文化，2，1969年）

新城俊昭(2001)：『高等学校　琉球・沖縄史』東洋企画，311p.

全国寺院大鑑編纂委員会(1991)：『全国寺院大鑑下巻』法蔵館，1022～1999p.

全国神社祭祀祭礼総合調査本庁委員会(1995)：『全国神社祭祀祭礼総合調査』神社本庁.

高野洋志(1992)：沖縄の御嶽の信仰と女性の地位．岡山理科大学紀要Ｂ　人文・社会科学，28B，121-130.

田上善夫(2005a)：東北日本とその周辺の地方霊場と寺社分布．富山大学教育学部紀要，59，51-64.

田上善夫(2005b)：中央日本とその周辺の霊場と寺院宗派の影響．富山大学教育学部研究論集，8，43-56.

友久武文(1998)：安芸門徒と報恩講．国文学　解釈と鑑賞，63(10)，135-142.

中鉢良護(2002)：歴史と構造－波照間島のプーリ

NII-Electronic Library Service

Toyama University

ン／アミジワー－.『琉球・アジアの民俗と歴史』榕樹書林，213-270.
長嶺中学校(2003)：地域の健康を祈る．琉球新報 2003年 7 月20日記事.
中村生雄(2000)：観音信仰と日本のカミ』観音信仰事典．237-251.
野津 龍(1985)：『鳥取県祭り歳時記』山陰放送，230p.
野見山覚応(2002)：『南蔵院らの霊場破壊と最高裁判決』私家版，29 葉．(初版 1987)
野本寛一(1998)：神々の風景．白州正子・堀越光信・野本寛一・岡田荘司『日本の神々』新潮社，66-89.
波照間永吉(1992)：八重山－風土と歴史そして祭祀習俗－．網野善彦・大隅和雄・小沢昭一・服部幸雄・宮田 登・山路興造編『列島の神々』平凡社，36-68.
平敷令治(1990)：『沖縄の祭祀と信仰』第一書房，564p.
藤巻正之編(1920)：『美作国神社資料』美作国神社資料刊行会.
外間守善(1992)：神々の源郷－遙かなる海の果て－．網野善彦・大隅和雄・小沢昭一・服部幸雄・宮田 登・山路興造編『列島の神々』平凡社，27-35.
堀越光信(1998)：姿をあらわした神々－「神像」の誕生．白州正子・堀越光信・野本寛一・岡田荘司『日本の神々』新潮社，60-65.
牧野 清(1975)：『登野城村の歴史と民俗』私家版，556p.
牧野 清(1985)：続・八重山島岳々名並同由来－八重山群島の御嶽に関する調査研究中間報告・石垣島－．琉大史学，14，1-20.
牧野 清(1986)：八重山のビッチル(自然石)信仰．八重山文化研究会『八重山文化論集』ひるぎ社，5-38.
牧野 清(1987)：桴海村『ヤマヌ神神事』覚え書－附・仲筋以東に於ける村の興亡・御嶽の成立等について－．喜舎場永珣生誕百年記念事業期成会『八重山文化論叢－喜舎場永珣生誕百年記念論文集－』53-83.
松原英治(1992)：宮古における御嶽分類の試み．宮古研究，6，12-35.
宮城真治(1937)：山原の御嶽．伊波普献先生記念論文集編纂委員『南島論叢』，沖縄日報社，95-109.
宮里勇清・大村太郎・金城信盛・知念 繁(1989)：行事と信仰．座間味村史編集委員会編『座間味村史』座間味村，343-430.
森 弘子(2002)：種子島宝満神社の御田植祭．日本山岳修験学会椎葉学術大会要旨，4 葉.
森 正人(2001)：遍路道にみる宗教的意味の現代性－道をめぐるふたつの主体の活動を中心に－．人文地理，53(2)，173-189.
山本 準(2004)：徳島県の写し霊場 －西国三十三か所－．鳴門教育大学研究紀要(人文・社会科学編)，第19巻，33－44.
結城登美雄(2003)：石垣四ヶ字の豊年祭．コーラルウェイ，89 号，6-13.
吉田扶希子(2002)：雷山千如寺に関する一考察．日本山岳修験学会椎葉学術大会要旨，9 葉.
湧上元雄(2000)：『沖縄民俗文化論 祭祀・信仰・御嶽』榕樹書林，584p.
湧上元雄・大城秀子(1997)：『沖縄の聖地－拝所と御嶽－』むぎ社，155p.
渡口初美(1990)：『沖縄の祭祀事典と冠婚葬祭・拝詞帖』琉球料理研究所，409p.

NII-Electronic Library Service